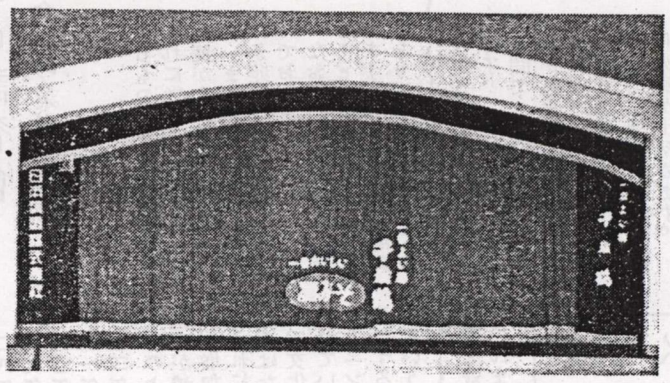
勞働会館に どん帳寄附

勞働会館は昭和二十六年四月開館してから、市民の色々な催しものや、会議などに活潑に使用されてきましたが、なかでも簡易結婚式などの利用がどんどん殖えてきて、昨年などは二百十件、利用人員で延四万九千人にもなりました。

ところが、開館当時つくつたステージのどん帳も大變いたみましたので、こまつていましたが、今度日本清酒株式会社から寫眞のような立派などん帳（袖まく垂れまくとも一式ついた）が寄附され一段と異彩をはなつことになりました。

勞働会館講堂使用の狀態

年度	使用人員
三十一年	二七、五六〇人
三十二年	四六、六四一人
〃	二〇七
三十三年	四八、七八七人
〃	二一〇



寫眞は寄贈されたどん帳

留萌夜ばなし（3）

笹島伊三郎老（藤山）にむかしをきく

私は明治九年に富山で生れましたが、北海道に来たのは明治二十九年、二十一才のときでしたから藤山にわらじをぬいで今年で六十三年になります。

三田村千瓢という九代目の戸長のときでしたが、当時の留萌はまだ〳〵未開の地で、今の十一線までがわずかに畑地として拓かれていた程度で、藤山などは全くの未墾地で、平地なのか山なのか判別がつかぬ位に雑木が生い茂つて居り、入植当時はこの雑木を焼き払うのが主な仕事で今どきでしたら全く勿体ない話です。

「藤山」の地名は、当時このあたりは小樽の藤山孫吉という人が地主だつたので、これが地名として残つているのです。藤山農場には加賀団体の人が多かつたのですが、私共が小作人として募集された条件は、伏木まで出ればあとは親方もちで三年間は米噌を支給する、土地もくれるという話で弟を連れて伏木から小樽を経て留萌にわたつて來ました。然し作業に從事するようになつて見ると、募集の条件とは大分違うことが分つて參りましたが、もともと私は内地の狹苦しい土地で窮屈な生活をしている二回だけ米の顔を見るのが普通でした。水田は明治三十二年にわずかに作つたのが始めで、その年は穂が出ただけで実がならなかつたがその後いろ〳〵と改良した結果どうにか収穫出來るようになりましたが、その頃は精米の技術が悪いため真黑な米ばかりで「藤山の米は食べられない」と云われて全然売れなかつたものです。そこで私は原米を旭川までも売つたところが、「矢張り本場の米は違うものだ」と云われたものですヨ。

その頃は「たなね」の收穫が生活のかてで、年間の収入は七〇円前後だつたです。当時米一俵が三円七十錢位だつたと思いますが、それでも米と麥を半々にして食べていましたが、これよりは廣い北海道で暮したいと考えて来たのだからこの点はさして氣にもとめませんでしたが、最初の頃は作付の種類をあやまつたため收穫が殆んどなく、それは苦しい生活をしたものでした。その頃は麥といなきびが常食でしたが、藤山の親方から米噌の支給がなくなつてからは、盆と正月のつて行きこれを精米にして売つたところが、「矢張り本場の米は違うものだ」と云われたものですヨ。

その頃は「たなね」の收穫が生活のかてで、年間の収入は七〇円前後だつたです。当時米一俵が三円七十錢位だつたと思いますが、それでも米と麥を半々にして食べていましたが、これでも私共はよかつた方なのです。住宅に至つてはだたみは勿論ありませんので、タモの木を挽き、それを敷いてその上によしをしいていたものです。当時は熊も相当いたらしく、とうきびは食い荒されるし、馬が追われる等被害が多いので、木の根かぶに火を付けて見張りをしたものですが、私は一度も出くはしたことがありませんでした。馬を持つている人は少く、私も二十五才のとき二〇円で馬を買いましたが、その頃の馬はたけが四尺～四尺四寸位が普通で留萌の筒井馬家に四尺八寸の馬がいたのが大變珍らしかつたものですが今では五尺の馬は大きいと云わないですから大變な違いです。

よく雪の多い年は豊作だと云いますが、私は必ずしもそうとは思つて居りません。雪が多いと消えるが遅いから、播付が遅くなり結局、い作は期待出来なくなるので、私は自分の経験からもそんなことは余り信じられないことだと考えています。

とに角苦勞の連続でしたがよくここまでこられたものだと自分ながら感心しています、と云われて老はそのふしくれだつたてのひらをじつと見つめていました。

老は今年八十二才、今も元氣で畑作りに精をつくされております。

課長は語る！

燕土木課長の都市計画の現況について

本市の都市計画は昭和九年二月に行政区域一円を都市計画法の対象となすべき区域として法定せられ、これを機に土地区画整理事業が計画せられ、直ちに準備段階として原野二線から原野六線に至る間、概算百万坪を対象に現況測量並びに設計に着手し、その区域を三工区に分ち、この事業主体として昭和十二年五月に留萌土地区画整理組合が設立せられたのであります。

その後數回にわたり設計計画が變更され遂に事業目的である土地の交換分合等に着手しえないうちに戰爭のため事業中止の止むなきに至り、昭和二十五年八月解散し、その目的は達成されなかつたのであります。

以上のように都市計画法による区画整理事業が未完成のまゝ中止され事業主体が解散したので、新たに市が事業主体となり法による都市計画事業として昭和二十六年七月見晴公園造成事業に着手し、現在総面積一八、六一七〇アールに対し延長約三千米に及ぶ園路正面花壇の築設、大小合せて〇、五七〇アールに及ぶ池の築設、広場、木柵、便所二ヶ所、一万二千本の植樹、野球場の築設、水銀灯、児童遊戯施設等など計画にたいし約八十五%の完成をみました。

ついで昭和二十七年三月旭町の一部から住之江町にかけて、中部土地区画整理事業に着手、総地積四万七千三百坪の内宅地二万九千六百坪、道路一万六千二百坪公園用地一千三百坪の区画整理事業を完成、現在家屋の移転除却の一部及び道路造成、排水溝の切替などについて着々その完成を急いだわけです。

つぎに街道造成事業（西五号線）及び錦町公園造成事業は昭和二十七年三月事業決定（建設省告示）をみ昭和三十年度に於て木柵工事を昭和三十三年度には便所、鉄柵、遊戯施設などを行いました。街路事業（西五号線）は原野一線四番地先から原野六線十一番地先の同延長二、七八五米、幅員二二米乃至一八米に対し現在八一%工事が完了している。

また留萌綜合都市計画樹立については、昭和十二年来の懸案事項であつたが、昭和三十二年度に於て建設省、道及び市内各官公廳との協議の上その基本を決定し、昭和三十三年二月その計画が出来直ちに建設省に申請し、道審議会の決定を昭和三十三年三月二十六日建設省告示になつたのであります。

元町土地区画整理事業は昭和三十三年五月二十三日の大火により、全地区を全年六月区域決定を申請し九月十八日建設省で決定し、十月十三日に事業決定を申請し、十一月二十日決定をみたので現在事業の出來高は約五五%位完了している

さらに都市改造上の住居計画として、権利制限に重大な関係のある用途地域の決定は昭和二十七年十一月申請をし、昭和二十八年七月二十四日建設省より指定を受け、準防火地域は昭和二十九年四月に決定されております。

新着圖書紹介

留萌市立図普館

皇城　中島卯三郎
チョゴリザ登頂　桑原武夫
未開の顔、文明の顔　中根　千枝
初級試験問題集　受験新報編集部
北海道勞働運動史　北海道勞働部
法律学全集40刑事総論　木村　龜二
夫婦　石垣　綾子
学生への手紙　山下　肇
これだけは身につけよう　エチケット　氏家　壽子
贈物の手引　堀口　健
あなたは酒がやめられる　ブリーン
新しい裁断のきもの　大塚　末子
自炊　河野　貞子
こどものおやつ百種　婦人之友編輯部

北海道林業統計　北海道林務部
北海道商工要覧　北海道商工部
日曜庭作り　飯島　亮
ジャズの歴史　油井　正一
現代英文法講座11　大塚　高信
海外交通ガイド　ハリス
新版世界文學全集6 從妹ベット　バルザック
〃　19　ジキール博士とハイド　スティーブンスン
世界大ロマン全集61 鎧なき騎士　ヒルトン
〃　62　拳銃王の死　ナイダー
世界文学大系4 インド集　辻直四郎譯
〃　56　ローレンス・バックスリー　伊藤　整訳
世界推理小説全集54 棺のない死体　ローソン
〃　57 カブト虫殺人事件　ヴアン・ダイン

留萌市勢回顧表　七回

年号	年	史実
明治	一二	○留萌郡耕地四町六反
		○札幌警察署増毛分室設置
	一三	○戸數百二十三戸、人口五四六名
		○留萌郡役所内に開拓使刑法局留萌出張を設ける
		○留萌郡耕地四町九反
		○留萌に来往した会津藩士藤郡太夫と云う者が、この年九月二十六日簡易小学校を創設した。これが現留萌小学校のそもそもの創めをなすものである。留萌尋常小学校は旧市街八十六番地の民家に初等科程度の小学校として誕生を見た。その通学区域は東北オピラシベ川より西南アベシラリ川に至る広大なものであつた。留萌、三泊、禮受各村兒童を収容した。初代校長は前記齊藤郡太夫であるが、氏は開校以来、明治十八年まで約五年間勤続、教育の創業に当つた
	一四	○鯡漁業に角網試用
		○海産税則を物産税と改稱、身欠鯡、胴鯡、税率一割五分、ナマコ鑑札一円
		○七月留萌郡役所増毛移転、増毛郡役所と改稱せらる。
	一五	○戸數百六十四戸　人口八七二
		○三月開拓使を廢し函館、札幌、根室の三縣をおく、増毛郡は札幌縣の管轄となる。
		○耕地と海産干場
		留萌村　耕地　三町四反四畝五歩
		海産干場　五町一反二十五歩
		禮受村　耕地　なし　海産干場　十一町八反七畝六歩
		三泊村　耕地　二反一畝　海産干場　十一町四反八畝七歩
		○留萌村戸數　七五戸　人口　三一六人
		三泊村〃　六八戸　〃　三三三人
		禮受町〃　三五戸　〃　二一〇人
		○三村果樹栽植數　林子四九本、李四本、梅三本、桃二本、梨八三本
		○鯉柏生産一万六千八百石　千二百七十円
	一六	○四月留萌川に渡船場設ける。
		○官報を発行
		○天気図を發行し天氣予報を開始。
		○戸数百六十二戸　人口八二六人
		○天然痘に対し留萌病院醫師長長尾甲齊、村民の依頼により種痘免許状の下附を得て、鋭意種痘に從事、（長尾甲齊は留萌地方に於ける刀圭界の功労者）委員長長尾甲齊、事務員に藤田隆造、伊山德藏等がいた。
		○四日市特別功勞者故五十嵐億太郎養父五十嵐網治、青禁縣下北郡火畑村から留萌村に転住。
		○六月黴毒檢査はすべて増毛公立病院に於て受檢すべしとの指令があつたが、留萌より増毛迄受檢のためには、往復三日を要するため、娼妓等の生活に一大脅威を与えるものとし、貸座敷業者、娼妓連名で、從来通り、長尾甲齊醫師に檢査願いたき旨、留萌郡長一柳平太郎に嘆願。